



## 震災を乗り越えるも コロナ禍に倒れた「化粧品メーカー」

### 震災被害を乗り越えた化粧品メーカー

化粧品OEMメーカー「コスメティック・アイダ」（神奈川県大和市）が、2月2日に東京地裁へ自己破産を申請しました。東日本大震災の津波被害を乗り越え、さらなる飛躍に向けて体制が整いつつあった最中、生産、販売、資金繰りなど、同社の計画をすべて狂わせたのが「新型コロナウイルスの感染拡大」でした。

同社の創業は1981年。複数の化粧品メーカーのOEM製造を手がけ、映画・テレビ・演劇などプロ向けの化粧品としても幅広く愛用されました。ピーク時の2004年3月期には年売上高約14億2,900万円を計上し、その後も堅調な業績推移をたどっていましたが、2011年3月、予期せぬ“自然の猛威”が同社を襲いました。主力の仙台第二工場が、東日本大震災で津波にのまれたのです。同工場は長らく操業停止に追い込まれ、甚大な被害を受けました。

### 操業再開に漕ぎつけるが……

被災から6年後の2017年。10億円超の補助金を活用し、第二工場をリニューアルして操業を再開させます。同時に、東北最大規模の化粧品製造拠点といわれる宮城本工場を本格稼働し、生産能力を大幅に向上させました。2020年3月期には海外向け案件や新商品案件で受注を獲得。既存得意先からの受注も確保し、上半期は前期を上回る売上で推移しました。

しかし下半期に入ると、同社を取り巻く状況が一変します。2020年以降、新型コロナウイルスの感染拡大により、中国から一部原材料の調達ができなくなり各案件の進捗が鈍化。その後も長引くマスク生活や外出自粛で、国内の化粧品需要も急減。同社も大幅減収となるなか、多額の税金の支払いが困難と判断し、2021年2月に破産申請に追い込まれました。

なお、既存事業はスポンサーへ譲渡する計画で、事業の譲受先が必要な許認可を取得するまで、保全管理人の管理下で同社は破産後も事業を続けています。

### 長引くコロナ禍に耐える体力はあるか

今年3月11日、東日本大震災から10年の節目を迎えました。この間、多くの会社が震災の影響で倒産や廃業の憂き目に遭いました。こうしたなかで同社は、主力工場の被害を乗り越え、被災から6年で操業再開に漕ぎつきました。

リスクを取って、巨額の設備投資を行なった同社にとって想定外だったのは、新型コロナの感染拡大に尽きます。直近2期は粗利段階から赤字となるなど、収益改善が急務だった同社に、長引くコロナ禍を乗り切るだけの体力は残されていませんでした。

会社は清算されますが、被災地・宮城の雇用を支えた生産拠点が、事業譲渡先の下で今後も存続される見込みとなったことが、せめてもの救いでしょう。

**ないとう おさむ** 2000年に株式会社帝国データバンク入社。本社情報部、産業調査部、東京支社情報部を経て2018年10月より現職。入社以来一貫して、倒産企業の取材、倒産動向のマクロ分析を手がける。専門は倒産動向分析、企業再生研究。